

清涼飲料業界 ペットボトルからペットボトルへの水平リサイクル

2030 年ボトル to ボトル比率 50%宣言

地上の資源を最大活用してペットボトルを再生・創造する

サーキュラー【循環】&エコロジカル【共生】・エコノミーの世界のトップランナーを目指して

兼

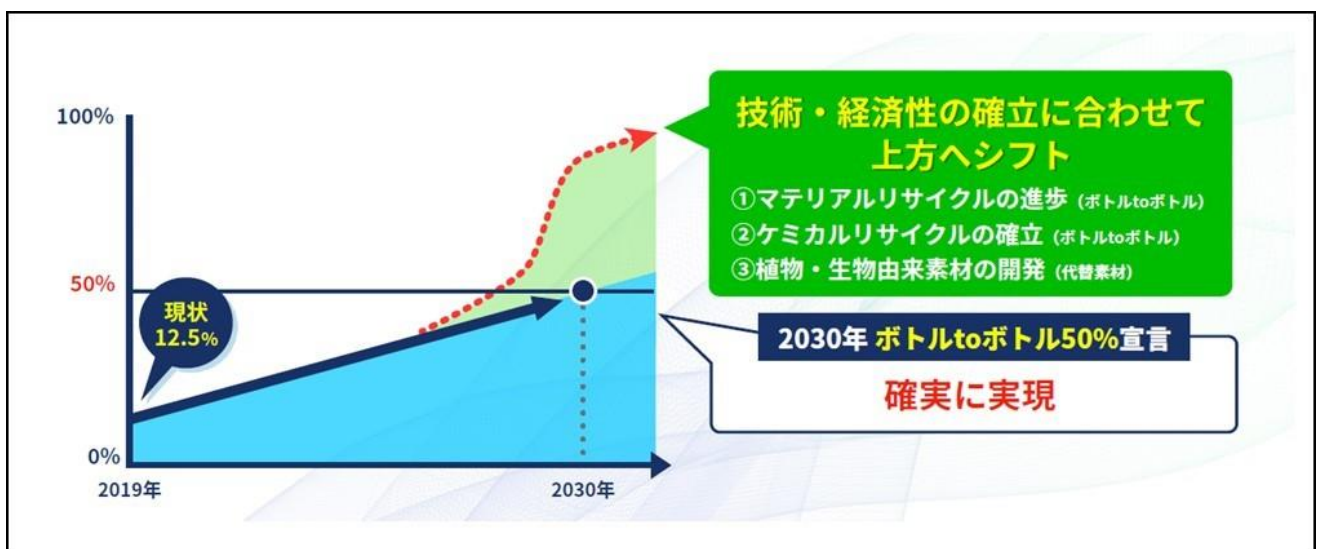
「ボトル to ボトル東京プロジェクト」報告

1. 2030 年ボトル to ボトル比率 50%宣言

清涼飲料業界の業界団体である一般社団法人全国清涼飲料連合会（東京都千代田区、会長：米女太一、以下：全清飲）は 2018 年 11 月に「清涼飲料業界のプラスチック資源循環宣言」としてペットボトルの 100%有効利用を目指すことを発表しました。

そしてこの度、清涼飲料業界として 2030 年までにペットボトルの「水平リサイクル」である「ボトル to ボトル」※1 比率 50%を目指すことを宣言します。

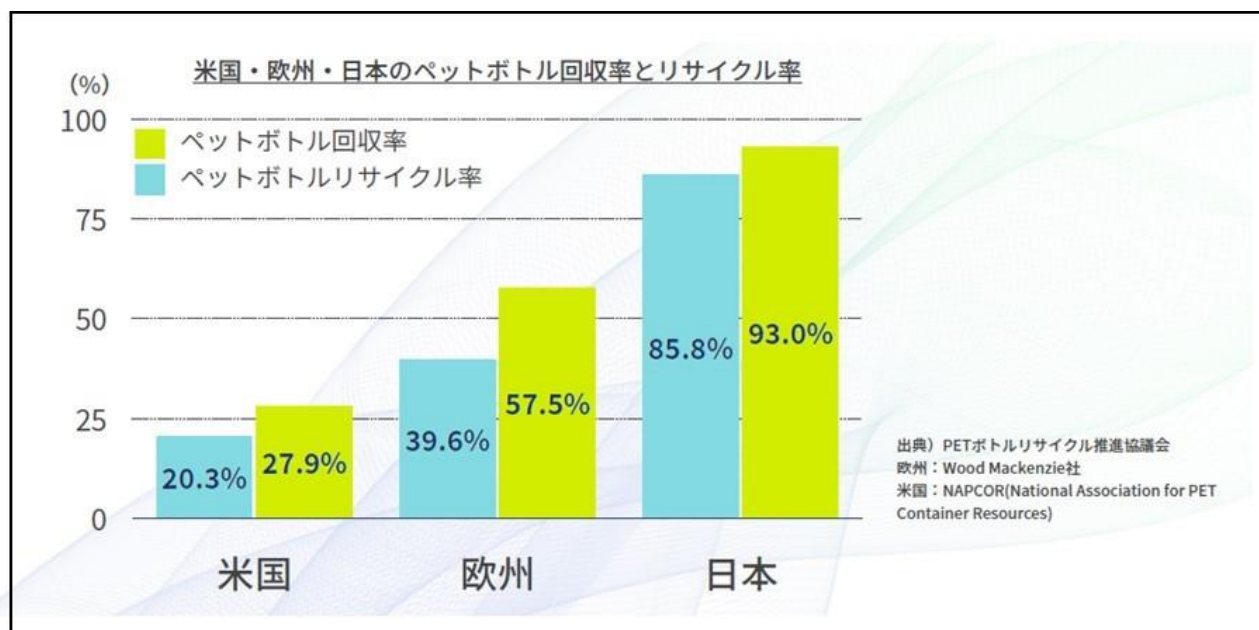
循環型社会への貢献と CO2 を含む環境負荷低減に向けては、地上にすでにある資源を最大限に再活用するサーキュラー【循環】& エコロジカル【共生】・エコノミーを構築することが重要と全清飲は考えます。清涼飲料水のペットボトル商品に使用されている PET（ポリエチレンテレフタレート）は、清涼飲料水の容器として適しているだけでなく、最もリサイクルに適したプラスチック材料の一つであり、使用済ペットボトルは正しく回収されれば、元の素材と同等の品質に何度でも戻すことができます。使用済みペットボトルを何度もペットボトルに循環させるリサイクルは「ボトル to ボトル水平リサイクル」と呼ばれ、同じ材料を何度も資源循環させる理想のリサイクルです。「ボトル to ボトル」の推進は、地上にすでにある資源の再活用であり、化石由来資源の削減と CO2※2 の削減に寄与することが可能となります。今回の「2030 年ボトル to ボトル比率 50%宣言」は、現状の技術と経済性に基じた宣言です。将来的には、「マテリアルリサイクル技術の進歩」と「ケミカルリサイクルの確立」を通じてより高い「ボトル to ボトルリサイクル比率」を目指します。さらに、「植物・生物由来の PET 素材」の開発の進展により、新規の化石由来資源の使用削減を促進します。これらを実現することによって、「地上の資源を最大活用してペットボトルを再生・創造する = サーキュラー & エコロジカル・エコノミー」において世界のトップランナーを目指します。



※1 「ボトル to ボトル」：ペットボトルをリサイクルして再びペットボトルとして使用する理想的な循環型リサイクルシステムで、何度も繰り返しペットボトルを資源循環できます。

※2 CO2 排出量の削減効果 56～63%。(リサイクルペットレジンの製造・販売会社 H P より)

下のグラフは、2019 年の使用済みペットボトルの地域別回収率とリサイクル率です。日本は、欧州と米国との比較で回収率、リサイクル率ともに圧倒的に高い水準にあり、ボトル to ボトル推進の基盤は確立されているといえます。



2. 「ボトル to ボトル東京プロジェクト」結果報告

① 目的

- (ア) ボトル to ボトルの推進には、使用済みペットボトルの確実な回収と、よりきれいな状態で集めることが重要。
- (イ) きれいな状態で集めるには、特に「消費者接点（消費者が排出する時点）」での消費者の理解と協力が必要。
- (ウ) この取り組みの一環として、農林水産省より「令和2年度食品産業プラスチック資源循環対策事業」として支援を受け、さらに2020年8月東京都と「ボトル to ボトル東京プロジェクト」キックオフ。東京都内で実証実験を協働で開始。

② 「ボトル to ボトル東京プロジェクト」の2つの実証実験

- (ア) 新デザインのリサイクルステーションを使った消費者の分別に対する行動変革の検証（2021年1月～2月）
 - 機材デザインと啓発メッセージによるペットボトル・キャップ・ラベルの3分別回収について検証。
 - 駅、配送センターなど現状はペットボトルの回収機会が提供されていない場所で、消費者ニーズの把握と新しい回収機会の場所での3分別回収について検証。
- (イ) 自動販売機横のリサイクルボックスの異物混入対策としての「下向き投入口」デザインの検証（2020年11月）

③ 実証実験で使用した機材

新デザイン・リサイクルステーション
(回転式)



新デザイン・リサイクルステーション
(押し蓋式)



新デザイン・リサイクルボックス
(下向き投入口式)



④ 実証実験場所一覧



⑤ 結果総括

- (ア) **オフィス**：適切な啓発メッセージと機材により、3分別（ペットボトル・キャップ・ラベル）へ進化させることに対する消費者理解は得られることが確認された（3分別達成率 81～95%）。実証実験ロケでは、実証実験終了後も3分別の実践を継続していただいているケースもある。
- (イ) **駅**：通学・通勤途中で飲み終わった飲料容器の排出ニーズを確認。環境意識も高く、分別排出したいという意向が強い。3分別には理解が得られることを確認（3分別達成率 81%）。当該ニーズに将来的にどのように対応するかが課題。
- (ウ) **配送センター**：配送センターに出入されるドライバーの皆様は飲み終わった飲料容器の排出場所を求めていることを確認。3分別には理解が得られることを確認（3分別達成率 70%）。当該ニーズに将来的にどのように対応するかが課題。
- (エ) **学校**：緊急事態宣言の影響によりサンプルデータの確保に苦慮した。大学では3分別の協力も見られたが、高校では用意した啓発メッセージが十分に届いたとは言えず、今後はステークホルダー別の啓発戦略が課題となる。
- (オ) **自動販売機横の新デザインのリサイクルボックス**：自動販売機横リサイクルボックスの異物低減策としての「下向き投入口」は仮説どおり減少につながった(異物混入率 43%→29%)。今後、他エリアで実証実験を実施し、汎用型の検討をしていく。
- (カ) **大規模分別回収啓発メッセージ発信**：三菱地所(株)様にて、「ボトル to ボトル東京プロジェクト分別啓発」ポスターのサインージ版を丸の内ビジョンで2021年1月19日～25日まで投影。

「ボトル to ボトル東京プロジェクト」協力企業、団体一覧（あいうえお順、敬称略）。

実証実験では多くの企業様・団体様にご協力をいただきました。この場をお借りして、改めて厚く御礼申し上げます。

- 株式会社 JR 東日本環境アクセス
- 株式会社 JR 東日本クロスステーション ウォータービジネスカンパニー
- センコーグループホールディングス株式会社
- センコー株式会社平和島 PD センター
- 公益財団法人日本サッカー協会
- 三菱地所株式会社
- 早稲田大学西早稲田キャンパス
- 早稲田大学高等学院

以上